

大滝結 博士(文学) 学位申請論文 審査要旨

メルロ＝ポンティにおける構造論的存在論

意味の問題を手がかりとして

審査論文の意図は、未完の体系として残されたモーリス・メルロ＝ポンティ(1908-1961)の哲学の全体を論者独自の視点から統一的に把握しようとするものである。初期の「構造」の考察と後期の「存在論」の思索との間に思想の単なる変化や移行を見るよりもむしろ、両者を結ぶ「構造論的存在論」という視点に立つことによって、中期をも含めた彼の哲学の全体像が浮かび上がってくることを、新たに公刊された研究資料を顧慮しつつ描き出す。

論を進めるうえでの鍵概念が「意味」、あるいはより分析的には「意味」(sens)と「意味作用」(signification)である。論者の言うところによれば、意味の概念は初期の「構造」や「ゲシュタルト」の議論から始まって「世界」や「実存」、中期に特徴的な「言語」や「絵画」や「スタイル」、後期の「存在」等の議論を貫いて、メルロ＝ポンティの著作においてつねに重要な役割を演ずるものであり、全体を内的に結びつけるものである。副題の「意味の問題を手がかりとして」は論者のかかる見方を表わしている。

このように「構造論的存在論」としてのメルロ＝ポンティ哲学を絶えず「意味」との連関において追究する論述は下記の順序でなされる。

第一章 前期メルロ＝ポンティ思想における意味と構造との関係

第二章 メルロ＝ポンティ中期思想における意味の問題

第三章 メルロ＝ポンティ後期思想における意味と構造の問題

第四章 無意識と意味

第五章 結論と考察

全体の論述の要点を示せば、下記のようなものである。

第一章では初期の二つの代表作『行動の構造』と『知覚の現象学』が分析される。『行動の構造』には二種の構造概念、静態的「構造」と(動態的あるいは発生的)「構造化」が認められ、後者を重視することによってその後のメルロ＝ポンティの思想発展の流れの中に同書を組み入れることができるということが指摘される。『知覚の現象学』では構造化は「形態化」(ゲシュタルトUNG)として引き継がれ、地平や世界、それらとの関係における身体、身体の所作にもとづく言語が論じられ、世界と身体との同時的ゲシュタルトUNGが明確化するとされる。『知覚の現象学』では signification は知的な意味であるのに対し、sens は言語的意味と絡み合う「世界の土着の意味」として規定されて、その後の思想展開の下地になることが示唆される。

第二章は主に『シーニュ』および『世界の散文』に依拠して言語と意味の問題に焦点が合わされる。メルロ＝ポンティはソシュールから言語の「弁別的」差異の考えを受け入れ

つつも、sens に関しては「土着の意味」の面を掘り下げて、芸術表現（特に絵画）の重要性を際立たせる。そのさい「パロール」が大きな役割を果たす。前期と後期との狭間の時期における「意味」の概念の錯綜があることが指摘されるが、この時期に語られる「スタイル化」や「制度化」の概念がゲシュタルトウングとの関連においてメルロ＝ポンティの思想発展の中に位置づけられる。特に「沈黙の言語」の概念が後期思想への移りゆきの前兆として暗示される。

第三章はハイデガー哲学の影響下での存在論の展開が確認される。ハイデガーが語る動詞としての、働きとしての Wesen（現成＝存在）がゲシュタルトウングと重ねて理解され、ゲシュタルトウングは否定性において働く「存在の裂開」となる。ここにおいて「構造的な存在論」（*ontologie structurale*）の概念の確証がなされ、構造化やゲシュタルトウング、それに伴う意味の生成も存在論的な差異化の運動として理解されるべきであり、遺稿『見えるものと見えないもの』はその事態を語っていることが示される。

第四章は、精神分析で説かれる無意識やリビドーの問題をメルロ＝ポンティの存在論の立場から検討する。リビドーは見えないものの力であり、存在論的構造化にもとづく生成であるとされる。

最終章はメルロ＝ポンティとの関連において構造主義（レヴィ＝ストロース、ラカン）の論点を取り上げて簡単に比較検討し、メルロ＝ポンティが構造主義と触れ合いつつもその存在論的思惟によって構造主義と隔たりを持つことを示す。最後に「後期思想において、これらすべての概念が、実は、存在論的構造という概念のもとに統一的に思惟されることになる。sens は、まず原初的な隔たりとしてあり、その隔たりとは究極的には存在の動き、存在の裂開に基づけられる」ことが確認される。

論者は必ずしも強調していないのであるが、その主張から明瞭に見て取られるのは、事柄の力動的な理解である。たとえば構造は「構造化」として、ゲシュタルト（形態）は「ゲシュタルトウング」（形態化）として、スタイルは「スタイル化」として語られている。これをさらに徹底させ、意味を「意味化」としてその力動的な生成の相において見る見方を全体的に強く前面に出した方が論者の言わんとするところがより明瞭になったであろうし、またそれがより事態に即した見方であると思われる。特に後期メルロ＝ポンティに決定的な影響を与えているハイデガーの用語 Wesen（存在）に依拠して、「構造化」も「ゲシュタルトウング」も「スタイル化」も Wesen の働き（存在の裂開）であるということをメルロ＝ポンティが示唆している以上、この方向への論究の掘り下げは必然的であると思われる。論旨が全体としてその方向に向かっていることは確かである。

審査論文は以上のような性格を有し、メルロ＝ポンティの哲学を着実にまとめ上げていると言える。その主張はありきたりのものではなく、従来見られなかった斬新な解釈を打ち出していることは明らかである。その点を評価したい。

2002年10月31日に行なわれた口述審査において審査員から指摘された疑問点をあげれば、次のようである。

1. 連続性（例えば知覚と言語、sens と signification の）が過度に強調されていないか。
2. 言語の問題の論じ方にもう少し緻密さがほしい。
3. 全体として副題の「意味」の問題に議論が傾き、それによって構造論的「存在論」の分析が弱まっているように思われる。
4. メルロ＝ポンティに強い影響を与えているフッサール、ハイデガーの思想の検討が不十分である。例えば後半で語られる「トポロジー」はハイデガーに由来するはずであるが、説明不足である。
5. メルロ＝ポンティのキーワードの魅力に振り回されるという一般的傾向がある。
6. 文字の誤植が散見される。

しかしながら、種々の文献を渉猟して、全体的評価の難しいメルロ＝ポンティの哲学に統一的解釈を与えようとする意欲的な解釈の姿勢は積極的に評価されるべきであり、論文としていくつかの部分的難点はあるにせよ、メルロ＝ポンティの著作の理解は相当深いという点では審査員全員の意見は一致している。

2003年1月16日に行なわれた公開審査での質疑においては、審査員および出席者からの質問に対して、全体的に適切かつ妥当な答弁がなされたと考える。よって、審査員は審査論文を博士（文学）の学位の授与に値するものであると判断する。

2003年1月16日

主任審査委員	早稲田大学教授	佐藤真理人
	早稲田大学教授	遠藤 弘
	東洋大学教授 文学博士（東洋大学）	末次 弘
	早稲田大学名誉教授	富永 厚